

# ウナギ延縄漁業におけるアカミミガメの混獲状況

石崎 大介

## 1. 目的

アカミミガメはアメリカ東南部とメキシコ原産の外来カメ類である。琵琶湖でも広く確認され、ウナギ延縄漁業やエリ漁などで混獲される。本種による漁業被害は確認されていないが、混獲量が増えてきているのではないかと懸念があり、本種が延縄の針に先にかかってしまうことや本種を処理するために漁労時間が増加してしまうなどの影響が起きる可能性がある。そこでウナギ延縄漁業において本種の混獲実態を把握するために漁獲日誌により調査した。

## 2. 方法

延縄漁業を操業している5または6人の漁業者に、2015年から2021年の4月から12月の操業日、操業場所、投入針数、採捕魚種、採捕個体数について漁獲日誌への記入を依頼した。アカミミガメが多いと思われる南湖および瀬田川の洗堰下流（以下、瀬田川下流）において本漁業の目的であるニホンウナギと、混獲されるアカミミガメの採捕個体数を針数で除して両種の針100本あたりの採捕数（CPUE）を算出した。そして年ごとに平均して、変動を比較した。なお、瀬田川においてはニホンウナギの採捕が極めて少なかったことからCPUEは算出しなかった。

## 3. 結果

期間中560操業（延縄回数）の有効な情報が得られた。瀬田川下流では112操業、南湖で448操業が実施された。南湖でのアカミミガメのCPUEは2015年から2020年は1程度であったが、2021年は1.5程度まで上昇した（図1）。ニホンウナギのCPUEは1.5～3程度で安定しており、期間中アカミミガメよりも高かった。瀬田川下流ではアカミミガメのCPUE

は2015年から2019年までは約0.5～2の間を変動していたが2020年から増加し2021年は3.7となった（図2）。このことから南湖ではアカミミガメは延縄の針100本あたり1個体程度が採捕されているが、2015年から2021年の期間中では増加傾向であるとは考えられない。このような状況やニホンウナギよりもCPUEは低いことから、アカミミガメが掛かることによってニホンウナギの漁獲機会を損失させているとは考えられない。一方で瀬田川下流では2019年から2021年の間にアカミミガメのCPUEは5倍程度上昇している。このことからこの水域ではアカミミガメの生息量が増加している可能性がある。これらのことから南湖では直ちに深刻な漁業被害が生じるとは考えられないが、今後の増加等を注視していく必要がある。

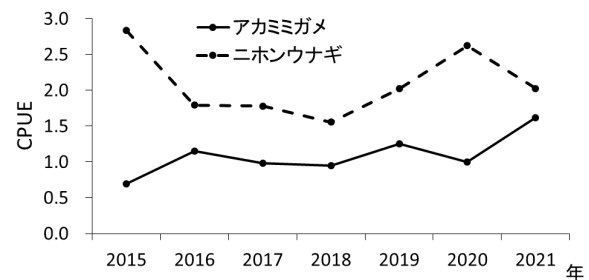


図1 南湖におけるアカミミガメとウナギのCPUE

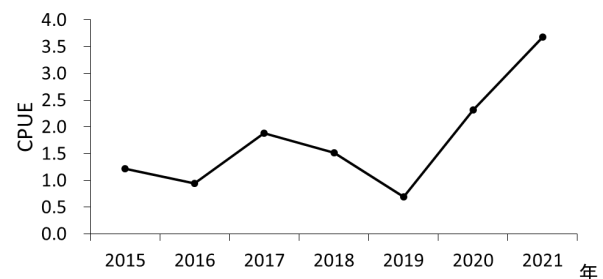


図2 瀬田川下流におけるアカミミガメのCPUE